インドネシア、バリ島の寺院における シヴァ＝ブッダ観念の表出

―バリ・ヒンドゥー寺院に見られる仏教的要素を中心として―

山　口　しのぶ

はじめに

人口の90パーセント以上がイスラーム教徒であるインドネシアの中にあって、バリ島は例外的に人口の９割がヒンドゥー教徒であり、彼らの信仰する宗教は「バリ・ヒンドゥー教」と呼ばれる。バリ・ヒンドゥー教においては「シヴァ＝ブッダ」という、ヒンドゥー教のシヴァ神と仏教のブッダを同一視する観念が存在し、この観念は、現代のバリ・ヒンドゥー教において一般の信者たちにもよく知られている。ヒンドゥー教は、一部はインドから直接、また多くの部分はジャワを経由してバリに伝わったとされるが、このシヴァ＝ブッダの観念については、東ジャワにおいて紀元13世紀から15世紀にかけて存在したマジャパヒト王国で誕生した観念がバリに伝播したものだとされている。

現代のバリには仏像や仏塔を備えているヒンドゥー寺院も少なからず存在し、シヴァ＝ブッダの観念は現代のバリ・ヒンドゥー教の寺院建築や儀礼[1]にも影響を与えている。本稿においては、ジャワおよびバリにおけるヒンドゥー教、仏教のインドからの伝播をシヴァ＝ブッダ観念と合わせて概観し、現在バリ島のヒンドゥー寺院に残されている仏教的要素について述べていきたい。

---

[1]（Widnya 2010: 50-51）によれば、マジャパヒトの影響が強まっていたバリではシヴァ＝ブッダ観念が盛んになり、例えばバリの伝統的な歌謡キドゥン（kidung）の一種『パマンチャンガ』*Pamancangah*中にあるように、バリ東部のブサキ寺院でのホーマ（homa）儀礼がシヴァ派と仏教の僧侶両方により施行されるということもあった。

1. ジャワおよびバリにおけるインド宗教の受容と「シヴァ＝ブッダ」の観念

ヒンドゥー教や仏教などのインド宗教文化は、紀元５世紀には東南アジア地域に伝播していたとされる[2]。インドネシアのスマトラ島では、７世紀後半にシュリーヴィジャヤ王国が東西交易の中継拠点として発展し[3]、この王国では大乗仏教が盛んであった。８世紀に成立した中部ジャワのシャイーレーンドラ朝においても大乗仏教が信仰され、この王朝下９世紀にはボロブドゥールなどの仏教寺院も建立された。その後中部ジャワでは古マタラム王国がおこったが、この王国はヒンドゥー教を支持し、シヴァ聖堂を中心としたプランバナン寺院などが建てられた。ボロブドゥール建立以降の時代（９世紀後半)、仏教ではインドから新たに伝わった密教（金剛乗、Vajrayāna）が盛んになり、菩薩形の金剛界五仏やマンダラなども知られるようになった[4]。

10世紀になると、ジャワにおける政治の中心は中部から東部に移ったが、この時代以降、現存する古ジャワ語による宗教文献が作られた。その中で、14世紀マジャパヒト王国下に宮廷詩人のタントゥラル（Mpu Tantular）により古ジャワ語韻律詩（kakawin）で作られた　仏教文学『スタソーマ』*Sutasoma*中には、「ブッダの本質、シワ(シヴァ)の本質はひとつなり、異なれど一つなり、二面の真理（ダルマ）のなきがゆえに」とある[5]。これはブッダとシヴァの両者は本質が一つであると説き、シヴァ=ブッダ観念を端的に表した言葉である[6]。また「異なれど一つなり」（bhinneka tunggal ika）は現在のインドネシアのスローガンである「多様性の統一」の元となった表現である。

15世紀成立の古ジャワ語の作品『クンジャラカルナ説話』

---

[2] （青山(2010: 267）は、5世紀の東南アジアがインド化の画期であったと述べている。

[3] （青山 2007: 131）

[4] （Kinney 2003:24）

[5] （石井1996: 462）

[6] ジャワでは、『スタソーマ』以前にもすでにヒンドゥー教、特にシヴァ崇拝と仏教（密教）の共存もしくは混淆が見られる。（石井 1987:273）によれば、728年のクルラク碑文は「その持金剛はブラフマー、ウィスヌ、シヴァ神であり、諸々の神が一つになったものである」と述べている。

*Kuñjarakarṇa Dharmakathana*には、ヴァイローチャナ仏（Wairocana）が教えを説く箇所で、例えば阿閦如来はイーシュヴァラ（シヴァ）神、宝生如来はブラフマー神というように金剛界の四仏をヒンドゥー神と同一視した後、ヴァイローチャナ仏は自身を「私はヴァイローチャナであり、ブッダとシヴァ（Śiwa）の顕れである」と言う[7]。また14世紀にタントゥラルによって作られたマジャパヒト期の宮廷年代記『ナーガラクルターガマ』*Nāgarakṛtāgama* では、シンガサリ朝最後のクルタナガラ王の死について、王はシヴァ・ブッダの土地で亡くなり墓所には見事なシヴァ=ブッダ像が祀られたと述べられ、また15世紀末の『パララトン』*Pararaton*（「王の書」）では、クルタナガラ王は「シヴァ=ブッダ王」と呼ばれている[8]。ここでは王が最高神のシヴァ＝ブッダと考えられているのである。

このようなシヴァとブッダの同一視は、ヒンドゥー教全般と仏教全体の結びつきというよりも、むしろヒンドゥー教のシヴァ崇拝と密教との結びつきを背景としている。しかしながら、このような結びつきは、ヒンドゥー教のシヴァ崇拝と密教が完全に融合し一つになってしまったことを意味するものではない。シンガサリ朝およびマジャパヒト王国期においても二つの宗教は独立して存在しており、各々の僧侶の組織も別々であったと考えられる[9]。

ヒンドゥー教のシヴァ崇拝と密教がお互いに影響を及ぼしあうという現象は、ジャワやバリに限定されたものではない。例えばネパール仏教やチベット仏教でも人気の高いチャクラサンヴァラやヘーヴァジュラなどのインド後期密教の仏たちの姿は、明らかにシヴァ神のそれに影響を受けている。またネパール、カトマンドゥ盆地では、観音がインドでシヴァを中心とする哲学を説いた聖者マツェーンドラナートと同一視されている。また造形に関して言えば、カトマンドゥ盆地では仏塔の台座がヨーニの形をしている場合があり、そこでは仏塔はリンガの意味も含んでいるのである。これらの事象は、確かにシヴァ崇拝と密教がお互いに

---

[7] （Teewu & Robson: 125）

[8] （石井 1996: 463）

[9] （Acri 2015: 274-275）

影響を及ぼしあっている例ではあるが、インドやネパールの人びとは、このような現象を「シヴァ＝ブッダ」という観念で説明することはない。このような意味で、「シヴァ＝ブッダ」という観念はやはりジャワ・バリに特有なものだということができるのである。

14世紀マジャパヒト王国のラージャサナガラ王の時代に、バリ島は文化的・政治的にヒンドゥー・ジャワ圏の重要な一員となったとされているが[10]、バリにおいては、シヴァ派と仏教の関係は混淆というより，共存・共生という輪郭を描いているという[11]。現代のインドネシアではイスラーム教、ヒンドゥー教、仏教、カトリック、プロテスタントが公認宗教とされているが、シヴァ=ブッダの観念は、公認宗教としての仏教とは区別され、あくまでもバリ・ヒンドゥー教の中に見られるものである。次節では、このような観念がバリ・ヒンドゥー寺院においてどのように表れているのかを、寺院で目にすることができる仏像や仏塔、建築などの要素を中心に見ていこう。

2. バリ・ヒンドゥー寺院における仏教的要素―仏像、仏塔、建築などを中心として―

筆者は2017年４月１日から2018年３月31日まで、東洋大学海外特別研究制度によりインドネシア、バリ島においてバリ・ヒンドゥー教に関する研究を行った。研究期間中シヴァ=ブッダの観念が寺院建築や図像表現にどのようにあらわれているかについて、「プラ」（pura）と呼ばれるヒンドゥー寺院を調査した[12]。本稿が調査対象とした寺院の１つプグリンガン寺院を調査研究したバリ人研究者I Nyoman Linggih 氏は、この寺院をシヴァ=ブッダの観念があらわれている寺院と考えており[13]、またI. B. Putu Suamba氏も氏の著書*Siwa-Buddha di Indonesia*で本稿が調査した寺院の一部のリストを掲載している[14]。このことから、現代

---

[10]（青山 1986: 5）

[11]（Acri 2015: 272）

[12] 本調査に際し、調査対象の一部の寺院の位置や所蔵の仏像、仏塔等の情報に関して（Vajrapani 2013）を参照した。

[13]（Linggih 2015: 89）

[14]（Suamba 2009: 139-140）

のヒンドゥー寺院に祀られる仏像や仏塔がシヴァ＝ブッダ観念の一つの表現であると、バリ人自身が考えていると解釈できる。本稿においても、そのような前提でバリ・ヒンドゥー寺院の仏教的要素を見ていきたい。

この課題における調査対象寺院は表１「調査対象寺院一覧」の通りである。なお、本稿で使用した写真はすべて上記の海外特別研究の期間中に筆者が撮影したものである。これらの寺院は多くがバリ中南部のギャニャール（Gianyar）県に位置し、その他少数ながら南部のバドゥン（Badung）県、および北部のブレレン（Buleleng）県の寺院もある。まずギャニャール県に位置する寺院の例について見ていこう。

No.	寺院（pura）の名称	所在地	寺院内に見られる仏塔、仏像等
1	プグリンガン寺院（Pura Puglingan）	Desa Manukaya, Tampaksiring, Gianyar	仏塔、菩薩像
2	ガラン・サンジャ寺院（Pura Galang Sanja）	Desa Pejeng, Tampaksiring, Gianyar	菩薩像（シヴァ・リンガと同じ小祠堂に祀られる）
3	イェ・アユ寺院 （Pura Yeh Ayu）	Desa Pejeng, Tampaksiring, Gianyar	菩薩像
4	バタン・クレチュン寺院（Pura Batang Klecung）	Desa Pejeng, Tampaksiring, Gianyar	菩薩像
5	ゴア・ガジャ寺院 （Pura Goa Gajah）	Desa Pejeng, Tampaksiring, Gianyar	ハーリーティー女神像
6	パナタラン・パングラーン寺院（Pura Penataran Panglaan）	Desa Pejeng, Tampaksiring, Gianyar	ハーリーティー女神像
7	プングクル・ウクラン寺院（Pura Pungukur-Ukuran）	Desa Sawah Gunung, Tampaksiring, Gianyar	菩薩像（２体）
8	ムランティン 寺院（Pura Melanting）	Desa Tatiapi, Tampaksiring, Gianyar	菩薩像
9	ブキッ・ダルマ寺院（Pura Bukit Darma）	Desa Buruan, Belabatuh, Gianyar	釈迦如来（もしくは阿閦如来）像
10	グヌルン寺院（Pura Gunuruan）	Desa Bedulu, Belabatuh, Gianyar	菩薩像
11	サムアンティガ寺院（Pura Samuantiga）	Desa Bedulu, Belabatuh, Gianyar	仏塔
12	バトゥブラン中央寺院 （Pura Puseh, Batubulan）	Batubulan, Denpasar, Gianyar	ブッダのレリーフ（２体）
13	ウルン・シウィ寺院（Pura Ulun Siwi）	Jimbaran, Kuta Selatan, Kabupaten Badung	メルに２つの入り口と階段（シヴァとブッダのため）
14	ダサル・ブアナ・アムリタ・ジャティ・シワ・ブダ寺院（Pura Dasar Buana Amerita Jati Siwa Buda）	Tajung, kubutambahan, Buleleng	仏塔（シヴァ神の祠と並列して設置）

表１ 調査対象寺院一覧

2.1　バリ中南部ギャニャール県のヒンドゥー寺院の例

2.1.1　タンパシリン地域マヌカヤ地区のプグリンガン寺院（Pura Peglingan）

プグリンガン寺院は、ギャニャール県タンパシリン地域（Kecamatan Tampaksiring）マヌカヤ地区（Desa Manukaya）、バサンガンブ村（Banjar Basangambu）に位置する。タンパシリンは、11世紀のワルマデワ王朝期に造られ王家の墓と考えられる「グヌン・カウィ（Gunung Kawi,「古代詩の山」の意）」など、バリでは古い時代に属する遺跡がある地域である。プグリンガン寺院には「偉大な蓮華座」（Padmasana Agung）と呼ばれる建物があったが、現存していない[15]。

寺院境内は３つの領域、すなわち「外陣」（nista mandala）、「中陣」（madya mandala）、「内陣」（utama mandala）からなる[16]。中陣には祭礼時の信者たちの集会場や飲食物を調理する建物があり、内陣には大きな仏塔がある（**写真１**）。Kaswatan、Nagafuchi、Fumoto（2009）は、バリにおける寺院成立の時代区分を「古バリ（Bali Kuno）期」（８~14世紀）、「バリ・マジャパヒト期」（14~15世紀）、および「後期バリ期」（15~17世紀）の３期としているが、プグリンガン寺院の大仏塔はその中で古バリ期の８世紀後半の建立としている[17]。この仏塔は比較的良い状態で保存されており、‘astadalamandala’と呼ばれる八角形の基壇の上に、先端がとがった釣鐘状の塔が載せられている[18]。この仏塔の中間部の四面には龕があり、４体の仏像の下半身が見られるが、かなり損壊が激しい。しかしながら、そのうち１体は結跏趺坐し与願印を結び、また今１体は定印を結んでいる。この２体は各々宝生如来および阿弥陀如来であると推測され、これらの龕には金剛界マンダラのうちの四仏が配置されていたと考えられる。なお1983年の文化遺産保存プロジェクト（BPCB）による本寺院の発掘の際、金剛界五仏のうち大日、阿閦、阿弥陀、不空成

---

[15]（Vajrapani 2013: 31）

[16]（Linggih 2015: 98）

[17]（Kaswatan, Nagafuchi, Fumoto 2009: 1859-1860）

[18] この仏塔の釣鐘型の形状は8世紀の中部ジャワのチャンディ・プラオサンのそれと類似している（Kaswatan, Nagafuchi, Fumoto 2009: 1787）参照。

就の４体の像が発見されている[19]。この発掘において、小ぶりの仏塔や菩薩像も出土した。寺院内に見られる菩薩像の一つ**（写真２）**は上半身のみであるが、右手に金剛杵を持つように見え、金剛手菩薩もしくは持金剛の可能性もある。プグリンガン寺院には、仏塔や仏像などとともに出土したヨーニなどが置かれ、またバリ・ヒンドゥー教の最高神であるサン・ヒャン・ウィディワサ（Sang Hyang Widhi Wasa）を祀る社もある。

2.1.2　ギャニャール県タンパシリン地域ペジェン地区の寺院

ペジェン地区（Desa Pejeng）は、古代のドンソン文化の存在を示す銅鼓を祀るサシ寺院（Pura Penataran Sasi）がある歴史地区である。今回調査した仏教的要素を含む14の寺院のうち、５つがペジェン地区にある。そのうち、**ガラン・サンジャ寺院**（Pura Galang Sanja）は、中央の祠堂と周囲のいくつかの小祠堂（pelinggih）からなる比較的小規模な寺院である。その小祠堂の一つに２体の像が見られ、筆者が確認したところ右がシヴァ・リンガ像、左は菩薩像であった。菩薩像は両腕が失われているが、顔に花が飾られ隣に安置されたリンガとともに丁重に供養を受けていた**（写真３）**。なお（Vajrapani 2013: 30–31）によると、この寺院付近のマニク・チョロン（Manik Corong）寺院からも数体の如来像が出土したとあるが、同寺院の調査の際、筆者は確認できなかった。

ガラン・サンジャ寺院の程近くにある**イェ・アユ寺院**（Pura Yeh Ayu）も小規模であり、中央の石像が数体祀られた祠堂と一つの小祠堂からなる。その石像の中に、結跏趺坐をした菩薩像とおぼしき像がある。頭部と両腕が失われており、左の肩から聖紐（yajñopavīta）のような飾りが見られる。胸の前で何らかの印を結んでいるようにも見えるが、はっきりとは見えない。

同じくペジェン地区にある**バタン・クレチュン寺院**（Pura Batang Klecung）も、中央に石像が置かれた祠堂と周囲の小祠堂からなる大規模とは言えない寺院であるが、インドネシア国の文化遺産（cagar

---

[19]（Linggih 2015: 94–95）

budaya）となっている。中央の祠堂にはガネーシャ像などを含む６体の石像が並び、左端に台座の上の蓮華座に結跏趺坐した菩薩像が並んでいる。この像も頭部と腕が失われ、その姿はイェ・アユ寺院の菩薩像に類似している。

ゴア・ガジャ寺院（Pura Goa Gajah）は11世紀の建立とされ[20]、洞窟（goa）の入り口上部の象（gaja）に似たボモ（bhoma）像[21]が有名である。洞窟内部にはシヴァ・リンガが安置されており、ゴア・ガジャがシヴァ神の寺院であることが知られるが、洞窟入口向かって左手に三体の像がある。その向かって一番左がハーリーティー（Hārītī）女神（鬼子母神）である**（写真４）**。この像は結跏趺坐し、耳輪や腕飾り、ブレスレットなどを身につけている。右手で与願印を結び左手で赤子を抱き抱える。また女神の周囲には６人の子供が寄り添っており、インドから続く仏教の女神ハーリーティーの特色をよく表している[22]。

パナタラン・パングラーン寺院（Pura Penataran Panglaan）もペジェン地区に位置する。この寺院も前述のバタン・クレチュン寺院と同様、国の文化遺産に登録されている寺院である。境内には、中央の社の両側に複数の石像が置かれた２つの社がある。そのうちの１つの社に、前の像に隠れた位置で立っている女神の像がある**（写真５）**。この女神の足元には子供が寄り添って立っており、（Vajrapani 2013: 44）におけるこの寺院内のハーリーティー像の記述とも一致するところから、この像はハーリーティーであると考えられる。この像は蓮弁で囲まれた光背を持ち、宝冠を被っている。

2.1.3　ペジェン地区以外のギャニャール県の寺院

タンパシリン地域にはペジェン地区以外にも仏教的要素を含むヒンドゥー寺院がある。サワ・グヌン地区（Desa Sawah Gunung）にある**プングクル・ウクラン寺院**（Pura Pungukur-Ukuran）は12世紀の建立

---

[20]（Kaswatan, Nagafuchi, Fumoto 2009: 1859-1860）

[21] ボモに関しては（山口 2003a）参照。

[22] バリではハーリーティーは、やはり子供をたくさん抱えるバリ固有の女神メン・ブラユト（Men Brayut）と同一視されている。

[23]（Kaswatan, Nagafuchi, Fumoto 2009: 1859）

と言われ[23]、現在国の文化遺産に登録されている。シヴァ神を祀る比較的大規模な寺院であり、ナーガ（竜王）の手すりのある階段を登り入口にいたるが、この寺院もプグリンガン寺院と同様、外陣、中陣、内陣の３つの領域（trimandala）からなる[24]。中陣には数十体の石像がいくつかの社に分かれて安置されており、そのうちの一つの社に２体の菩薩像と思われる石像**（写真６）**が、ガネーシャ像などのヒンドゥー神像とともに祀られている。これらの２体の像は立像であり、調査当日は下半身を白布で覆われていた。２体の右腕は損壊しているが、左腕は残されており、両者とも左手で何かを持っている[25]。また２体とも肩から聖紐を掛けている。なお、中陣の奥の内陣には仏教的要素は見られず、シヴァ・リンガおよびシヴァ神像が祀られている。

タンパシリン地域のタティアピ（Tatiapi）地区にある**ムランティン寺院**（Pura Melanting）には、小さく区切られた一角に位置する祠に、一体の菩薩像と見られる石像がある**（写真７）**。耳朶の長いこの像も顔面と両腕が損壊しているが、像の前にはたくさんの供物（canan）が供えられており、現在も日常的に供養を受けていることがわかる。

ギャニャール県ブラバトゥ（Bulabatuh）地域の**ブキッ・ダルマ寺院**（Pura Bukit Darma）は、10世紀ウダヤナ王の時代に建てられたとされる[26]。別名「ドゥルガー・クトゥリ（Durgā Kutri）寺院」とも呼ばれ、寺院敷地の最奥にある「水牛の魔神を殺す女神（Mahiṣāsuramardinī）」としてのドゥルガー女神が有名である。この領域は、寺院が位置するブルアン地区の中央寺院（Pura Peseh）、ウルン・チャリク（Ulun Carik）寺院、ブキッ・ダルマ寺院、そしてドゥルガー像のある最奥のカダルマン寺院（Pura Kedharman）の４つの寺院の複合体となっている[27]。その中のブキッ・ダルマ寺院の境内に複数の石像が安置され、そのうちの一体が仏像である**（写真８）**。僧形で蓮華座に結跏趺坐し、右手は触地印を結んでおり、釈迦如来もしくは阿閦如来であると考えられる。なお、

---

[24] (Sudarhana 2015:343)

[25] Vajrapani（2013: 42）は、左手に持つのは「払子」（cāmara）と述べている。

[26] (Suhardana 2015a: 235-236)

[27] (Sudarhana 2015a: 235)

(Vajrapani 2013: 34) によれば、寺院敷地の一部であるブルアン地区の中央寺院に不空羂索観音が安置されているとのことであったが、筆者が調査したところ、不空羂索観音は確認できず、石像がある２つの並んだ社にはそれぞれ水牛の魔神を殺す女神の姿をとるドゥルガー女神像が安置されていた。同じブラバトゥ地域の**グヌルン寺院**(Pura Gunurun)は、２つの社とバリ・ヒンドゥーの神々が降り立つ場所としての「パドマサナ」(padmasana) と呼ばれる施設があるのみの極めて小規模な寺院である。(Vajrapani 2013: 37) によれば、この寺院にも菩薩像があったとされるが、筆者が観察したところその菩薩像は確認できなかった。

グヌルン寺院と同様ブラバトゥ地域にある**サムアンティガ寺院** (Pura Samuntiga) は、989年から1011年、それまでのヒンドゥー諸宗派や仏教徒たちの９つのグループの対立を調停するための話し合いがなされた場であり[28]、バリ東部カランガスム県にあるブサキ寺院に次ぐ由緒ある寺院であるとされている。

この寺院も外陣、中陣、内陣からなり、境内にはバリの主だった寺院の神々が集まっているといわれるが、内陣のバリ・ヒンドゥー諸寺院の社が集まる一角に古い仏塔がある **(写真９)**。他の社や建物にはそれぞれ名称が書かれた札が付けられているが、この仏塔には名称の表示がない。筆者がこの寺院の非バラモン階級に属するプマンク僧 (Pemangku) に尋ねたところ、この仏塔は「シューニヤ」(śūnya) と呼ばれているとのことである。「シューニヤ」は仏教では「空」を意味するが、バリでは宗教的、哲学的真理の意味で使われる。

ギャニャール県のバトゥブラン地域にある**バトゥブラン中央寺院** (Pura Puseh Batubulan) には、寺院入口のファザードに８体のレリーフがある[29]。８体のレリーフには、カーラ、シャンブ (シヴァ)、ヴィシュヌ、ブラフマーなどのヒンドゥー神の他に、２体のブッダが含まれている **(写真10)**。これら２体のブッダは結跏趺坐し、両手を足のすねに載せており印は結んでいない。２体のブッダ像はそれぞれ龕の中に入っており、龕は蓮華の模様で縁取られている。龕の上部には鬼面が描かれて

---

[28] (Sudarhana 2015a: 525)

[29] これらの8体のレリーフに関しては、(山口 2003b) で詳しく述べた。

いるが、バリの鬼面が「ボモ」と呼ばれ下顎を持つのに対し、この寺院の鬼面は下顎が無く、中部ジャワのボロブドゥールに見られる鬼面「カーラ」（kāla）と非常に類似している。

2.2　ギャニャール県以外の寺院建築に見られるシヴァ=ブッダ観念

以上、バリ中南部のギャニャール県の寺院に見られる菩薩像、仏塔、鬼子母神などの仏教的要素を見てきた。ここでは、バリ南部と北部の事例を述べたい。以下の２例は、ヒンドゥー寺院建築においてシヴァ=ブッダの観念が端的に表れている事例である。

バリ南部のバドゥン県ジンバラン地区にある**ウルン・シウィ寺院**（Pura Ulun Siwi）は11世紀に建立されたとされる[30]。一般にバリ・ヒンドゥー教の寺院には、「メル」（meru, サンスクリットのmeruに同じ、「須弥山」の意）と呼ばれる五重、七重、ないしは十一重の塔があるが、このウルン・シウィ寺院の１つのメル（**写真11**）は、他の寺院とは異なった２つの階段とドアを持っている（**写真12**）。この寺院のプマンク僧によれば、一つのドアはシヴァのためのものであり、今一つはブッダのためのものだという[31]。

バリ北部のブレレン（Buleleng）県クブタンバハン（Kubutambahan）地域、タジュン（Tajung）地区にある**ダサル・ブアナ・アムリタ・ジャティ・シワ・ブダ寺院**（Pura Dasar Buana Amerita Jati Siwa Buda）内には、その名の通りシヴァ=ブッダの観念が寺院内の建築で具現化されている。この寺院は森の斜面沿いに位置するが、その境内の一部である斜面の一角にシヴァの祠堂と仏塔が並んで建てられている（**写真13**）。この寺院の建立年代やその詳細な歴史的背景は現在のところ明らかでないが、シヴァ祠堂と仏塔は明らかにシヴァ＝ブッダ観念を意識して並べて置かれたものであろう。

---

[30]（Sudarhana 2015b: 509）

[31]（Eiseman 1990: 41）にも同様の記述があり、そこではシヴァの方がブッダより優れており、シヴァとブッダは兄と弟のような関係と言われる。

結び

以上、バリ・ヒンドゥー寺院に見られる仏教的な諸要素を見てきた。ギャニャール県にあるプグリンガン寺院では、中央に８世紀の創建とされる大きな仏塔が置かれ、金剛界の四仏と思われる仏像の痕跡も見られた。発掘では菩薩像が出土した一方、シヴァ・リンガと組み合わせられるヨーニも発見され、この寺院では古くからヒンドゥーのシヴァ崇拝の要素と仏教（密教）の要素が共存してきたと言ってよいだろう。

タンパシリンのペジェン地区には、本稿で取り上げた13寺院のうちの５つの寺院がある。いずれの寺院も社や祠堂に古い石の仏像、菩薩像が安置されていた。現在では各像の下半身には白い布が巻かれ、また像の前には供物のチャナンが供えられており、丁寧に供養されていることがわかる。しかしながら、これらのほとんどの像の顔や腕は失われており、わずかにゴア・ガジャのハーリーティー女神像が、かなり完全な姿をとどめているのみである。またペジェン地区以外のギャニャール県の寺院に安置された菩薩像等も損壊が激しかった。これらの像は作られた当時から継続的に祀られてきたのではなく、一度打ち捨てられて土に埋まっていたものであろう。現在はシヴァ＝ブッダ観念を背景にヒンドゥー神像とともに祀られているが、これらの仏像が打ち捨てられた経緯を明らかにすることは、バリのヒンドゥー教諸宗派と仏教の歴史的な関係性を考察するうえで重要だと思われる。

同じギャニャール県にあるサムアンティガ寺院の仏塔は、プマンク僧によれば「シューニャ」と呼ばれる。「シューニヤ」は仏教では「空」を意味するが、（安藤 1998: 1016-1017）によれば、18世紀頃バリで成立したとみられる『プールヴァカブーミ』*Pūrvakabhūmi*中では、至高の神が「サン・ヒャン・シューニヤ」（Sang Hyang Śūnya）と呼ばれ、それが男女神々の祖サン・ヒャン・ウィディ・ウィシェーシャ（Sang Hyan Widi Wiśeṣa）のことであり、Sang Hyan Widi Wiśeṣa がSang Hyan Widi Wasa（バリ・ヒンドゥーの最高神の名称）とも呼ばれることを指摘している。この仏塔がそのようなことを意識して「シューニヤ」と呼ばれてきたかは定かではないが、仏塔が仏教の空とバリ・ヒンドゥーの最高神を意味する名称で呼ばれているのは示唆的である。

ギャニャール県の寺院に古い仏像や仏塔が置かれている一方、バリ南

部のウルン・シウィ寺院や北部のダサル・ブアナ・アムリタ・ジャティ寺院のように、シヴァとブッダが並び立つ存在であることを充分に意識した上で、メルに２つのドアを設置したりシヴァ祠堂と仏塔を並べて設置することでシヴァ＝ブッダ観念を明確に打ち出そうとする寺院があることも、今回の調査で明らかになった。これらの寺院の成立年代や、シヴァ＝ブッダ観念をあらわす施設が、どの時代にどのような経緯で作られたのかは現在明らかでない。この点に関しては、今後より詳細な調査を行い疑問点を明かにしていきたい。

またペジェン地区のガラン・サンジャ寺院では、一つの祠堂に古いシヴァ・リンガ像と菩薩像が一緒に祀られていた。これについて筆者は、元来別々だったリンガと菩薩像が、シヴァ＝ブッダの観念を意識して後に一か所に安置されたものと推察している。バリ・ヒンドゥー教徒のシヴァ＝ブッダ観念の変遷を考える上でも、このような合祀の作業について聞き取り調査や文献調査から今後その経緯を明らかにしていきたい。

参考文献

青山　亨 1986「古ジャワ文学におけるスタソーマ物語の受容と変容」『東南アジア研究』24-1: 3-17.

青山　亨 2007「インド化再考－東南アジアとインド文明との対話―」『総合文化研究』（Trans-Cultural Studies）10: 122-143.

青山　亨 2010「ベンガル湾を渡った古典インド文明－東南アジアからの視点―」『南アジア研究』22: 261-276.

安藤　充　1998「バリ・ヒンドゥーの最高神の系譜」『印度學佛教學研究』46-2: 1011-1019.

石井 和子 1987「古代ジャワの密教教理書『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン』について」『東京外国語大学論集』37: 263-281.

石井 和子 1996「古代ジャワのシヴァ教と仏教―王権とのかかわりをめぐって―」『印度學佛教學研究』45-1: 460-467.

山口しのぶ 2003a「バリ・ヒンドゥー教の神々」『中京女子大学アジア文化研究所論集』4：53-99.

山口しのぶ 2003b「バリ・ヒンドゥー寺院の神像について―バトゥブラン・プサ寺院の事例報告」『密教図像』22: 15-27.

Acri, Andrea 2015 “Revisiting the Cult of “Śiva-Buddha” in Java and Bali,” *Buddhist Dynamics in Premodern and Early Modern Southeast Asia*, (ed. by D. Christian Lammerts) , Institute of Southeast Asian Studies, Singapore, pp. 261-282.

Eiseman, Fred B. 1990 *Bali: Sekala & Niskala: Essays on Religion, Ritual, and Art*, Tuttle, Singapore.

Kinney, Ann R. 2003 *Worshipping Siva and Buddha*, University of Hawai'i Press, Honolulu.

Linggih, I Nyoman 2015 “Siwa-Buddha di Pura Pegulingan,” *Forum Arkeologi* 28-2: 89-102.

Suamba, I.B. Putu 2009 *Siwa-Buddha di Indonesia*, Program Magister, Ilmu Agama dan Kebudayaan, Universitas Hindu Indonesia Denpasar bekerja sama dengan widya dharma, Denpasar.

Sudarhana, K.M. 2015a Ensiklopedia Pura, Jilid 1, Paramita, Surabaya.

Sudarhana, K.M. 2015b Ensiklopedia Pura, Jilid 2, Paramita, Surabaya.

Teeuw, A. & Robson, S.O. 1981 *Kuñjarakarna Dharmakathana*, Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- En Volkenkunde, The Hague.

Vajrapani, Mpu Sri Dharmapala 2013 *Puja Parikrama Baudha Kasogatan di Bali*, Pāramita, Surabaya.

Widnya, I Ketut 2010 “Pemujaan Siva-Buddha dalam Masyarakat Hindu di Bali.” *Mudra* 22-1: 39-55.

【附記】本稿は、2017年度東洋大学海外特別研究制度における研究成果の一部である。

写真2　プグリンガン寺院の菩薩像

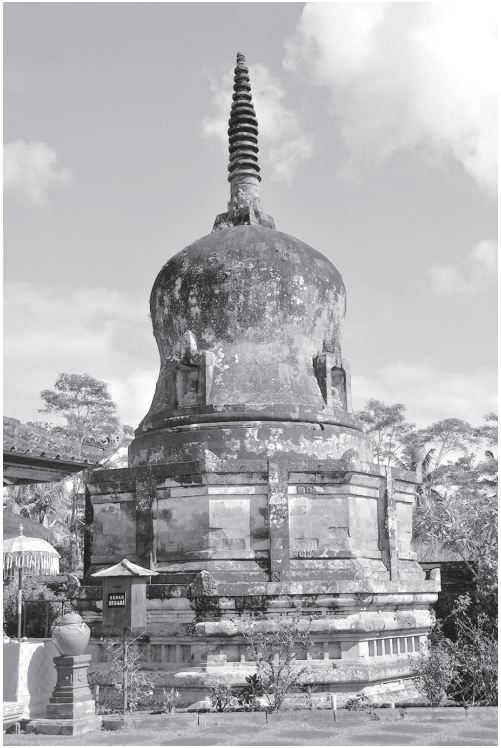

写真1　プグリンガン寺院仏塔

写真3　ガラン・サンジャ寺院の菩薩像（左）とリンガ（右）

写真4　ゴア・ガジャ寺院のハーリーティー女神像

写真5　パナタラン・パングラーン寺院
のハーリーティー女神像

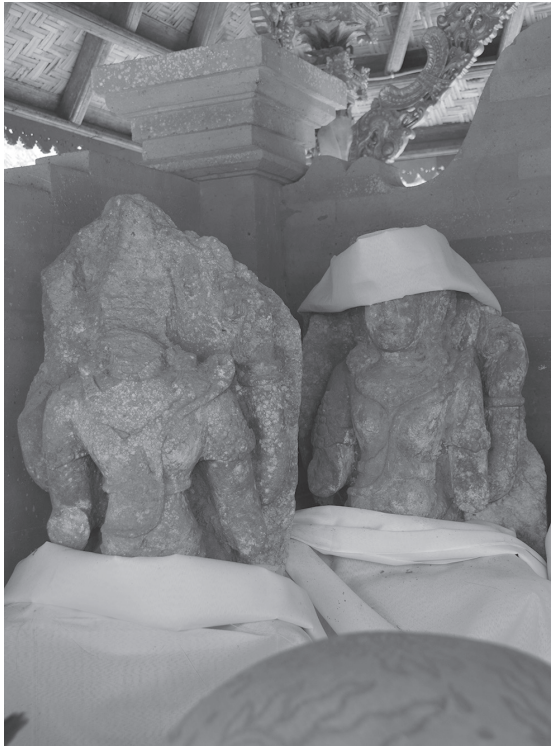

写真6　プングクル・ウクラン寺院の2体
菩薩像

写真7　ムランティン寺院の菩薩像

写真8　ブキッ・ダルマ寺院の釈迦如来
（もしくは阿閦如来）

写真10　バトゥブラン中央寺院のブッダ像

写真9　サムアンティガ寺院の仏塔

写真11　ウルン・シウィ寺院のメル

図12　ウルン・シウィ寺院のメルの2つの階段とドア

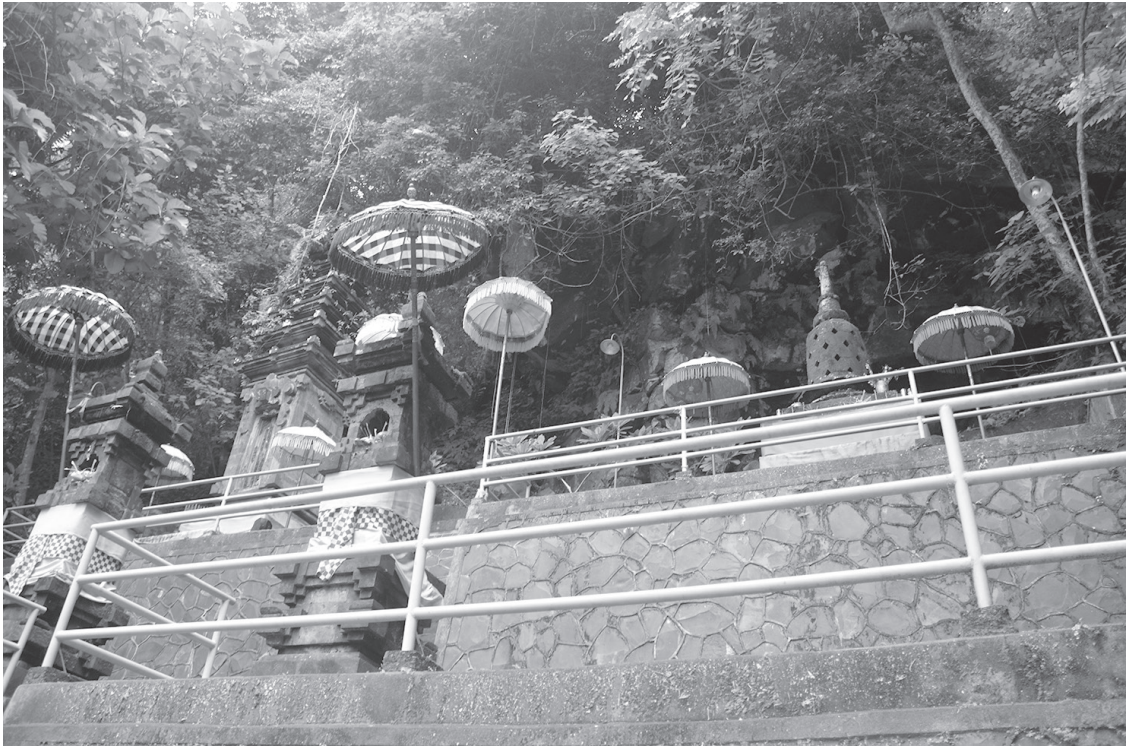

写真13　ダサル・ブアナ・アムリタ・ジャティ・シワ・ブダ寺院のシヴァ祠堂（左）と仏塔（右）